

日本における洋学摂取の一パターン（二）

——佐久間象山の場合——

高瀬 學

目次

はしがき

本論

I 作業仮説

II 象山の二著にみられる所説展開

i) 省魯録（以上第五〇号）

ii) 礮卦（以下本号）

III 象山所説の意味解析

ii) 礮卦

卦①

嘉永壬子陽月、嘉永壬子冬十一月の二つの叙、易経に模した体裁をとる本文、礮卦後記より成る礮卦はその題目が示すように西洋の砲術を周易によって包摂し、洋学を洋儒の説くところとしてとらえ、邦儒と並ぶものとして組みこんだ著述であって、前述したように天を原点とした象山の体系を極めて明白に示す書をなしている。

礮卦叙の一で自ら語るように、周易をよくし、就寝前に必ず一両の卦をたてていた父の影響によって二、三才の時に早くも六十四卦名を誦んずるまでになっていた象山は易学の大家であった。彼は既に述べたように弘化四年信州の大地震に際して犀川決潰の危惧が生じ城主を避難させるべしとの議がおこった時、その蘊蓄を傾けて易断を下すなど易への言及も屢々であった。彼はまことに周易の造詣が深かった。^④

だが、周知のごとく阿片戦争は朱子学者、易学者象山に一大衝撃を与えた。^⑤特に洋兵の法と大きな武力とは驚きであり、これが彼を原書による西洋撰取に向わせた。即ち天保十四年以後早くも弘化二年には寢食を忘れた努力によって一通りのことは大抵読得申候にまで蘭書をこなし得る身となり弘化三年閏五月の帰藩後オランダ百科全書シヨメールに基づいて新知識を拡げ、この年正月既に藩に設けられていた砲学局によって嘉永元年正月藩命を奉じて二斤野戦砲一門、十二拇野戦人砲、十三拇天砲三門を鑄造試射するなど礮術への関心を持ち続けた。また、これとともに三十四年も前に公刊された和蘭版歩兵訓練書を嘉永二年手に入れ西洋流の隊伍訓練の法式を研究修得して自己の礮術を西洋真伝と称し、^⑥嘉永三年七月藩より暇を得て江戸深川小松町の藩邸内に銃砲の製造所を設け併せて礮術の教授を行なうに至った。この江門における新礮法はとくに豊前中津藩が一時七十三名も入門させるなど盛況を極めた。^⑦また一時帰藩し、試射によって有名な満照寺事件をひきおこした。象山はその後嘉永四年五月一家をあげて江戸に移り木挽町で私塾を開き兵学、砲術特に海防の方策について講述し十一月姉ヶ崎での試演失敗を差し挟みながら嘉永七年四月五日松陰密航事件に連座して逮捕されるまで活動を続けた。^⑧そして、この間嘉永五年陽月より十一月にかけて砲理を以て易象に擬し、西洋の芸術を東洋の道德に包摂する体系の書礮卦を著わしたのである。^⑨

ただ、ここで注目せねばならぬのは、小にしては御国の為、是を大にしては皇国の干城にも相成候為めであったと

はいえ、既に家学としての朱子学を正学としていた象山にとって洋学という異種体験をいかに組み込むかについて山陽はど表に出てはいないが、彼なりに心の闘いがあつたに違いないことである。既述したように彼も人、我れも人なりとして、東西の言を会して一家の書を編むのは、そんなに安直なものではなかった。そこには彼なりの挫折と苦悶があつたはずである。かかる意味において、特に読宋氏風論喜而作はその喜が物語るように、注目すべきものと考えられる。それは象山の洋学組み込みに当つての内面の記録ともいえるからである。次にこの原文を要約しつつ、その語るところをみることにしよう。

彼はまず、これまで易に帰依し、精且つ確なるものを周易の中に探りあて、また漢宋諸家の易説に親んできた去し方を顧みる。だが、今この宋氏の書を手にすると聊か勝手がちがひ別物と視ざるを得ぬようである。だが、そういった疑念もある日、はたと思ひあたることであつて消えることになった。それは、仮令方法が異なつていても正確を期する点では同じであるというものであつた。東洋も西洋も互いに合應しあつており、万里を隔ていても人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらぬ天を前にしては毫も違つていないという想念であつて、これでこれまでの苦惱も鎮まつたと述べるのである。象山はこれまでの迂余曲折の末ここに思ひ到つた。つまり、かかる正鵠への両是の術ととらえることで洋学はまさに洋儒の説と化し、異物といった狭隘な瞽聾の域を脱し文字通り吾心を慰沃させ、喜び勇んで原書による洋学修得にのり出し得たのである。彼が、こういった蘭語による、従来の華法、杜撰誤伝のものに代る礲術を西洋真伝と称した時、このような天人合應をふまえた西洋包摂の体系が成つていたのであり、だからこそ西洋礲術の中に天理としての易理と相発する不可言之妙を発見し、礲卦を綴ることを得たのである。かかる意味において礲卦こそ象山の西洋学包摂に際して到りついた想念体系を示す書をなすのである。

このため、銃礮が満照寺事件、姉ヶ崎試演失敗に見る如く、その攻伐吞并の手段として電撃の威、焚焼の惨において、のち省警録雑文第七でも述べられる通り昔日の火攻とは比すべくもない程大きくなり、致遠破堅催鋒陷陣またすぐれ、弓矢にその長を失わせ靡させる程異なっているのに着目して、弓矢と銃礮とは何んのつながりもない別物であり、諸大易を著わした聖人の知もはるかに及ばぬものと見ることに よつて礮を易に擬すること自体が既に無意味とする質問を先き取りし得たのである。それは今辿ってきたように象山自身が己れに課した問いであり、既に彼なりに答えを出していたものだったのである。彼はまさしく天理たる易理こそ礮を正しくとらえ得るものとしていたと言つてよいのである。だから、危険度も増し、人に危厲の地を踏ませ、咎を自らにも取る確率の大きくなった礮術を我がものにし危険を避けてゆく道こそ、かかる易理の実践に立った君子の道でなければならぬとみるのである。そこに文字無之人々にも礮術の普及を念じまた自警の書としても編まれたこの書の意味も存するのである。

さて、西欧の想念体系がもつ構造化性をその本来の個トボスより切り離し、このメカのみをいわば標本的にとらえた象山は、この構造的なメカ作動の示す同一性に眩惑され、これを不可言の妙として自己に所与の朱子学的な粹組の中で作動するものと理解し、これによつて包摂の体系をうちたてた。そこには尚所在正鵠といったヴェクトル的な想念が基底をなしていたと言えよう。彼にとつて年少の頃から既に思想的に血肉と化していた易理は天人合応の場をなし、道と実の相互対応を含み求是のための用複合体展開の方法である格物致知実践の次元でもあった。それは天命を知つて、これに安んじ楽しむことに存するものであり、まさに理を窮め性を尽し以つて命に至る、いわば人事をできる限り極限値たる天に近づけてゆき、かかる意味における正鵠を文字通り目ざす場であり、これが易理だったのである。まこと易理こそ天理であり、六十四卦とその他の組み合わせによる複雑な体系と火攻、弓矢といった時に随う、

同じ格物致知作動のより精妙正鵠具體性をもった各論の二つのものを自らの中に含む広く且つ大なるものとみられるのである。外国の利器を用いることはもともと周官司馬之属が行なったことの延長とみるべきものであって既存の体系にとって異物、別ものではない。象山はかかる把握にたつて睨卦を弓矢と礮に通ずる卦とみ、礮を弓矢のより精妙な、求是正鵠において、より天に近づいたものにとらえ、その使用に際しても咎をうくることなきを期するにはいかにすべきかを、まこと易のもつ義理と占筮の両面にたちつつ、説こうとするのである。だから縷説したように睨卦は、かかる象山想念の一定の整理とその体系化とをふまえた著述であつて、単なる砲術概説書の域を出ること大なる重要著作といつてよいのである。^{②⑦}

そこで、この著作の内容に目を向けることにしよう。

まず、総論的な把握にたつて有る所のもので、その象が易にないものはないとした上で卦と象の関連を扱って導入部を形づくる。^{②⑧}次いで西洋の礮は器の製用の具術の法において精緻を極めたものであるが、あくまでも有るところのもの一つであつて、易に求めることが可能であるから、易理易象でとらえ得るとする。こうして礮卦もまた弓矢の卦たる睨卦であると断じ、かく見てこそ、その器の體用、術のすべて、礮を学び、これに従事するものの利害得失がみな掌の上にあるが如く明白になり、これに日星を望むように通達するに至ると結論し易経の体裁を大体において採りつつ、睨卦を本卦として、その解説たる本文に入つてゆくのである。^{②⑨}

ところで易は漢書芸文志にも、その道は深し、人は三聖を更、世は三古を歴たりと述べられているように本文にあたる狭義の経と解説の部分である伝とより成り、前者は更に卦、卦辞、爻辞、後者は卦辞の解説たる彖伝、卦全体の説明である大象、爻辞の一つ一つについて解説する小象の二部を含む象伝、易全体の概論ともいふべき繫辞伝又大伝

などの十篇を有している。^{③①} 広義の易経はこのすべてである。象山は礲卦の本卦を睽とたて、こういった易経に擬しつつ、独自の展開をみせることになったのである。^{③②}

まず、象山は睽卦そのものが礲をなす所以を大象といった形で説明し、伝において上離下兌で卦をなす睽こそ礲に該当する理由を述べる。つまり離卦三と兌卦三より成るこの卦は全体的に見ると底が円く二重で堅牢であり、中に穴をもち上卦の一は砲口、その上の実をなすものはその口を強くしている象なのであってまさに礲そのものである。また、この卦の象は上下でみてみると上が厚く中が空で下にまた口があき、底をあつく固めている様であってこれまた礲である。^{③③} 更にこの卦がもっている意味から考えると離は火、兌は金であるから金の口より火が上るものと解され、これまた礲の象なのである。西洋人が礲のことを貅児蒙礪と呼称するが、貅児は火、蒙礪は口をさす言葉であり、そこには暗合の妙があつて、これでも易が広く且つ大であり、すべてを備え、毫もいつわりのないことが知られようと述べて次に卦辞を貞厲、君子吉无咎とし、この象辞を伝として掲げ、これに象伝を伴わせて爻辞にとつなぐ。^{③④}

象山はこの卦辞の伝として、この睽卦は易経象伝の火動而上 澤動而下を前掲のように兌の澤を金ととって上離の火炎上し下兌の金は下に墜ち性情相反するゆえに乖異であるとする。また六爻全体の形からいうと初九は陽爻で正を得ているが、他は陰位に陽爻、陽位に陰爻があつて皆それぞれ位に当たっていないので意の如くならぬ旨が示唆される。このため兵器の改良が進み、兵器としての徳性を具えるに至つたが、そうなればなるほど人を害する程度も大きくなつて生をうむ天地の大徳と相反すること甚だしくなるのであり、これがまた礲というものである。だから、この睽卦たる礲の特質をはつきり承知した上で濫用せぬよう自肅自戒し、生を生ずる天地の大徳に合うよう行動する真の君子こそ礲を用い得る者といえる。そこにこの貞厲、君子吉の卦辞の意味も存している。だが六爻のうち初九の

みが位を得ているといっても全体としては乖異の甚だしきものであるから、仮令君子であつても自分の姉ヶ崎試演の失敗にみるようにあやまちを免れ得ぬ、つまり吉を得ぬこともあるのでまさに卦辭のいう通り吉にして无なしなのである。³⁵⁾

また、この睽卦全体を別の見方、つまり卦辭を部分的にとつてゆくと火動而上 澤動而下に対応して火輕而上 金重而下と言ひ換えられるがいずれにしても火澤火金といった相睽して互いに補い合うことのない、異つた性状の二物より成つてゐることは確かである。³⁷⁾ だから、この卦の意味を敷衍すると火の性は輕疾で炎上し、金の性は重遲で下に墜ち、二物は元來相反し補ひ助け合はぬのであつて、そこにこの睽の義が存するのである。従つて睽において火と金とは互いになじまず金は火を上らせるわけである。このため睽は睽を以てその用としてゐるから、正しく扱つてもなお危険があるのである。³⁸⁾ またこの卦の才で見ると内卦は兌外卦は離であり、易經でそれぞれ説明を述べてゐるのをうけて兌は說順也而為貞 離は文明也為悔とし、内說順者 優柔厭飫 而心不戾於理也 外文明者 學術足於外 英明發於外 能審利害之機 而不踐危厲之地也⁴¹⁾ といった解釈を加えるのである。

さらに内卦、外卦の中を見ると、第五爻の主位に柔があるので牝牛を養うような柔順さで中道を守つて二爻の剛を用いてゆけば事宜しきを得ることになるが、これは君子のみがよくするところである。だから卦辭にいう吉而无咎となるわけである。⁴³⁾

ところで、睽はまた相反するものを内に含むことによつて、まさに欲出而入之 欲進而退之 欲伸而屈之といった反作用を利用することで大なる効用が生れてくるものである。⁴⁴⁾ こういったものこそ物の理なのである。老子は既にこういつた理を了知しており、微明⁴⁵⁾といつてゐる。この作用、反作用という物理は睽に現れており、睽卦を体した睽は

まさにこの於入知出 於退知進 於屈知伸の理を実現したものとなっている。だから威力もあるといつてよい。

さて、礲卦の離上兌下は火が金の上にあるさまであるが、ここで離は上卦つまり外卦をなすので火は常にあるものではなく必要な時にだけ用いられることがわかる。だから火有というべきではなく火興とせねばならぬのである。このため、金火は性よりいつて互いに相反するが、変化によっては資け合うこともあり、ここにまた礲の大きな効用も存するのである。だから礲の象を見て、君子は須らくこの内卦たる兌の中に内を警めるの象である貞兌正秋肅殺の象あるを知り、姦先をして損害を与え兄弟相闘ぐの愚を犯して徒らに悔らしめることのないよう注意すると同時に外卦をなす離は南方盛大の象なので、礲により威武を海外に張り夷狄に我への易悔の念をおこさせぬようにせよとのまさしく警内威外こそが君子の道たることの示唆をよみとらねばならぬと説いて爻辭とその伝に移るのである。

ところで礲卦は睽卦つまり離上兌下三三であるから、初、二、三、四、五、上はそれぞれ九、九、六、九、六、九である。象山はここで小象として爻の位置とその象徴するところを解説し、卦辭、爻辭の全体に関する説明である大伝で本文敘述を締め括ることになるのである。

初九などの各爻について易經本文にならつて爻辭を掲げ、次に伝として然る所以を説明する体裁をとつて筆を進める。^④

初九の爻辭は習有素往何咎である。かかる爻辭の立てられる理由は兌卦つまり説体にあつて陽爻つまり陽剛が一番下を占め、他と何ら係りをもっていないからである。つまり剛陽の才を以て、他に煩わせられぬ素直さで礲学を習えば上達するし、また陽剛さをもって努力さえ重ねれば事理にも詳しくなる。また他との係累のないことは売りつける必要もなく、ただ己れに忠実に行なつて往けば過咎なきことを期し得よう。だから爻辭通り習有素往何咎であり、ま

た自慢して人の氣をひくこともなく、ただただ自分が大をなすことにそのねらいがあるだけなので志美也ということ⁴⁸ができるのである。

第二爻はまた剛陽であるから九二であり、その爻辭は晝日競々 中道愬々 悔亡である。というのは第二位は本来陰位であり陰爻がふさわしいのに陽爻がきているので中正を得ず、ために悔吝があることになる。だが既に示した通り、第五爻たる主位に柔があるので柔順な態度をとるならば上にある離の明にあうことができる。だから礲術を学び、その要領を会得して、知識が広まれば広まるほどその懼るべきものであることを悟るようになる。こうして晝日競々 中道愬々といったものを座右の銘とすれば悔亡ぶ結果となろう。つまり易經にいう晝日競々とは日が余すところなく照らして明るくないところが見当らないにも拘らず顧慮不安なさまをいうのであって常に自ら足らざるところなきかを思い、小成に甘んぜぬことを意味している。また中道愬々は中道といった平坦で険しいところもない場所にあっても畏懼の貌である愬々然とした心構えをもち、慢心することなく努力に努力を重ね、注意力をいやが上にも高めてゆけば後悔するようなことはなくて済むわけである。だが、爻そのものが中正を得ていないので、一寸でも精進を怠り、理に昏く道を得ず、周囲によく注意することもせず、畏懼の念を少なくすると忽ち失敗して、取り返しのつかぬ羽目に陥る可能性が大きいことをよく心に刻みこんでおく必要があろう。第二爻はこのように陽が陰にあるという本質的な喰いちがいを呈するので本来は悔いがあって当然であった。だが、離卦との関り合いがあるため、理の前に柔順な態度に終始し、まだ知らぬことが山程あると自肅自戒し、懈怠の心をおこさぬよう努め、かかる条件さえ満たせば、辛うじて後悔しないですむことを示唆しているのである。⁴⁹

第三爻は陰爻であるから六三であって、この爻辭は眇能視 跛能履 焚如 死如 棄如となる。⁵⁰というのは三とい

う剛位に柔爻が来ているので位に当らず、ために能力が不十分であるのに気持だけが剛によって先き走りしてしまうといった乖異が生ずるからである。つまり出来損いの器でも精巧を極めたものと思ひ込み、また醜拙の技でも上手だときめてしまうのである。まるで隻眼の人が、両眼を具えた者ほど實際はよく見えないのに自分ではつきり視得ると思ひ、また跛や瞽が両足の完全な人と同じように歩けると自分だけで考えているようなものであつて、客觀的なものに頑くなく目を開かず強情に自己主張だけに終始しているわけである。こういった態度で礫に接すると必ず失敗を演じ、ひどい火傷を負つて命をおとすことになりかねぬ。だから、この爻辭がでてくるのである。だが、明智の者ばかりかかと思ひ上りを捨ててかかるから難を避け得るわけなので、敢えて凶とまでいう必要はない。また象によると眇も跛もそれぞれ視たり、歩いたりする時に必ず補助が必要なのであるから、他よりの支えともいふべき忠言に耳傾けぬことがあると焚焼などの禍にあう。だが、これも自ら招いたものであり、自らの思ひ上りに根ざしたものだから誰れを怨むべきものでなく、さればこそこの辭も出てくるわけである。^⑩

第四爻よりは上卦たる離に移るが、陽爻であるので九四となる。この爻辭は有善 大其舟 利用禦寇 用征伐であり、その根拠が伝で明らかにされるのである。つまり第四の陰位に陽爻が来ているので、貞が内、悔が外であつて前者は学ぶ者、後者は天下の務をする者に關わるのである。もともと、この四は公卿即ち大臣の位をさすものである^⑪が、陽爻が陰位にあるため、天下の務を果す大臣の位にある者に求められるべき資格は剛柔に偏らず、また文武を兼備したものでなければならず、かくの如き者を得て始めて天下の備えがなされ得ることを意味する。つまり司馬法の言う善ある者として戦陣に通曉して、器物の精を極めて備えを予めすべきことが求められるのである。だから舟にしても常に礫をのせ、またそのそれぞれが精巧でなければならぬことになる。舟がすぐれていても礫がそれに伴わず、

逆に礮だけがよくても舟が小さくて礮が十分に使えぬといったアンバランスがあつてはならぬという意味が籠められている。礮精而舟大というバランスのとれたものであれば天下の務めをよく遂行でき、仮令外から闖闕するものがあるとしても、これに対応してゆくことが可能となる。率服せぬ者はこれを伐り、まさに兵法にいう以守攻以攻守を果し得ることになる。まこと禦寇なのである。またその力は征服するに足るもので強暴の国も敢えて釁をひらくことはしなくなってくるであらう。そこには常に相手とのバランスをふまえた発想の重要性が示唆されており、独りよがりでは不可である。だからこそ利用禦寇 用征伐なのである。⁵³

ところでこれを象より見ると、まさしく有善 思隣戒であり、隣国たる清の阿片戦争で蒙った敗北を殷鑑として自ら戒めとせねばならないであらう。つまり隣とはここでは第三文のことを指しているのであつて清はこの言眇跛覽の暴慢剛愎による自是で自ら禍をとつたのである。この愚を戒めてこそ善があるとの示唆である。満清はこの自是によつて西洋礮艦の術をとり入れず、ために英夷によつて屢々敗北を喫して天下の笑ひものとなつた。四はこれを承けて、この失敗の反省にたち懼れを知ることによつて予防に特に意を用い、事を正しく講じてこそ、この位にある大臣の任は果されることになるのである。交辭にいう有善はこの思隣戒で実現されよう。また大其舟は交辭の語るように用あるものとなるため威繼光の言を参考にする必要がある。彼はいう。今のところ我々の船は大きく倭舟は小さいので車が蟻螂を碾く如く圧し得るが我々の船のように大きくなるともう手の打ちようがなくなると。特に礮が精巧になつているだけに大舟をつくるのは現時においては益々上計といつてよいことがこれでも明白であると断じて次の交の解説に移る。⁵⁴

第五爻は既述したように主位にあるが、これまた陰爻柔爻なので六五であり、その交辭は革故以新 已日乃孚 終

用譽命である。

ところで、かく言い得る理由は次の通りである。すなわち六五は文明たる離卦の中をなし、また主位つまりは尊位にある。本来は剛陽の爻があるべきなのに柔爻となっているのでその意味するところは己れを虚しくして、二、四にあたる士、卿の剛陽にして賢なるものを補佐とせよである。もしも、このようにすることができると下の者は悦び服し、以って天下の弊を革め、天下の治を一新できるであらう。ただかかる主位にある君たる者がこの任を果すに當って心すべきことは剛位に柔爻があることである。だから、既往のもので粗糲にして用いるに堪えぬもの、弊壞したものは当然革めねばならぬが、これまでの慣れもあって人心未だ遽かに信じ得ぬところがあることを十分に勘案して改爲に際しては仮令明君上にあり、賢相これが補佐の任に当たるとはいっても必ずその周知徹底をはかる必要がでくるのである。かかる詳告申令 至於終日といった慎重な手続を経て始めて、人々はその偽りなきを信じ、その趣旨に副うことができるので改革して後世に利すことを得るのである。だが同時にその改革をまた墨守することも不可なることは言を俟たない。これが、この爻辞前半の意味なのである。⁵⁵象山は次に爻辞後半の終用譽命にふれ、これを明巧也と補足し、かく考えた理由を解説する。

事の非なるものを飾りたてて、その非がないとしてはならぬし、⁵⁶また理の是なるものはこれを偽って是がないとしてはならぬ。改革せねばならぬ時には聊かの疑いを差し挟まずに断行すれば真の名声を博し得るからである。かかる事は明睿さがあり、これを顯してこそ始めて可能となるのでまさに明巧なのである。⁵⁷

第六爻は剛陽の爻が陰位にきたものであり、その爻辞は上九執其故貞吝である。⁵⁸

ところで、この上九で睽卦は終ることになるが、ここでも陰位に陽爻があり、まさに不中不正事の乖異甚だしきを

現わしている。その点で六三の暴慢頑迷なると類を為すものである。だから自欺自是のままに、客観的に力がないにも拘らず主観にあるものと思ひ込み、自らの固定観念に執着して、目耳を濁らせ、善なるものを率直に認め、その変化に対応できぬとまさしく正道の蠹賊と化し、迷惑の極に達してしまふのである。こういった端的な例が満清であつて守旧を正しいものと井蛙の如く思ひ込み、英夷に敗れ、天下の嗤ひものになった。そこに、こういった其故を執ると差吝をうけるに至る理が明白に示されていよう。これこそまさしくこの爻辞の意味するところなのである。^{⑤9}そして象山はここで更に爻辞について補足説明を行なう。それは不知公也である。というのも執滞偏固のために古いものを棄て切れぬのは固より己れの狭い視野を出ぬことに因つていのであるから、公道を知らぬことと同義だからである。従つて公道の何たるかを知るといふ学尚致知に徹すると必ずや故常をすて新しいものよることができ、これによつて差吝を避け得る結果になるわけである。まさに貞吝なるは不知公也なのである。^{⑥0}

以上が卦辞、その解説、爻辞、その解説の概要である。そして、全体に懸けた辞としての大伝をこれに付して礲卦の本文を締め括ることになる。

大伝の辞は古者として繫辭伝よりの引用である弦木為弧 剡木為矢 弧矢之利 以威天下^{⑥2}で始まる。その伝で象山はそこに睽卦の反戾乖異が実現されている姿を説き、今は弧矢に易えるに礲を以てし、金を鑄て弾となし薬を合して火となして外邦を畏れさせるに至つた経緯にふれ、辞の言う通り内外を威服させた弧矢の利はその延長であり、より精緻を極めた礲によつて得られるとして礲卦の本文を終わることになる。

だが、既に指摘したように象山は更にこれに後記を付しているので、煩をいとわず次にとりあげることにした。

象山はここで易卦の名をあげ、卦爻に詞を繋けることは宋末から行われるようになったと易学史の経緯にふれ、こ

ういった新しい思いつきは輟耕録が輟吝などの卦をのせている例に見られるが、よく検討してみるといずれも易理の真なるものを伝えているとは言い難いとする。^{⑥5} これはこの礲卦がこういった文人のその場限りの皮相的な巧思の類いとみられることに備えるとともに自分の自主的な易理習得の所産である旨を明示する意図で後記の筆をとったとする文をなすものである。易理と西洋砲術の習得、更にこの易理による包摂の底にあくまでも自らの眼、自らの経験への忠実さが働いていたとするのである。だから睽を本卦としながらも、易学の知識を集約して易経とは異なった、だが易理の活用にたった独特な辞をうむに至った所以を示唆するのである。いわばそういった意味で礲卦が自らの体系の書であることをこの片言隻語の中のべているといつてよからう。まさに可韻者 悉用古韻 至其所繫之詞 亦無一字不寓其象といつた周到さでただ古経に擬するといった笑うべき猿真似でない、真の易理にたったものをつくつたと自負するのである。そして初九より上九に至るまでその然る所以に説き及んでゆくのである。

例えば初九の習有素といつた爻辞は、易では陰陽互いに入れ換わるの理によつて九たる陽が陰に変ずるつまり九変じて八と為つて第五爻まで上つてゆくと陰の卦たる坎が現われるので、その卦名習坎を体して習となるわけである。^{⑥7} またこの素は兌の色との対応で白なのであり、白といい、素というも前のものに白地従順につき従うといった物の性を示すのである。

ところで兌は季節でいうと正秋であり、収穫の時でもある。^{⑥9} だから色からいっても白であり、また素であり、履卦三三初九の爻辞が素履、賁卦三三の上九の爻辞また白賁であるのもその象履の初九に同じであることによつたのである。^{⑦0} 易の中で素といひ白というもみなこの兌卦にとるのである。

九二は上に離卦たる明があり、^{⑦1} それぞれの卦の中で中位にあるものとして九二と六五は陽陰相对应しているのま

さに昼日である。だがこの陽陰に變ずれば三つまり震卦をなし、説卦伝第十一章によれば大塗であり万物を始めて生ぜしめる大路をなすものとなる。^{⑦④} 従つてまさに中道であり、これらの昼日と中道に易経震卦の爻辭たる競々、索々つまりは懇々が対応し震雷驚愕の象をなすのである。

六三は中が空虚で目に似た離卦をその真上にもつが下に澤たる兌があるため、これを毀すの象をなす。だから、目をもともと二つもちながら睽によつて相反する動きをすることを意味するから、まさに眇なのである。またここに含まれる陽の陰變した震卦は説卦伝第九章によれば足を意味するので同様に両足を具えていながら完全ではないので跛であり蹢であり、これはまた六三、九四の陰陽を變じた大畜の卦三三とも関連することになる。つまり大畜は剛陽の伸張をとどめるの象であるから足を容易に坎塞させるので、ここから跛がでてくるのである。またこの三は火である離卦の中に居ることとなるため乖異甚しき象である焚を象とし、兌體にあるため離大兌澤に入るであつて火は消える、つまりは殺されるの象をもち、離卦の火は上り下卦兌の澤は下つて互いに相反する営みをみせるがこの三が下卦にある關係上棄てられるの象をも示すのである。^{⑦⑤}

九四で善有りといったのは説卦伝で離は明るい陽氣さが伴つており、内は空虚なるものと現わすとされているのを承けて明るく中空なもの二つとして舟の象との関連でとらえるべきだと見るからである。^{⑦⑥} だが兌が下卦にあつて、ために互いに三の坎卦を含むことになる。これは万物が巢に隱伏する冬または水がひそかに忍び込むに似た盗すなわち寇の意をもつことになる。^{⑦⑦} 従つて、これを合して舟の間に寇賊が出没するの象ととれるわけであり、またここで四爻の陽九を變じて陰八とすると第二爻から第六爻までに三の、而も陰爻の連続する大離の象が現われてくるので大舟を備えてこれに対処する必要が示される。また六五は下卦に兌卦つまり金があり、上卦に離火があつて主位をなすの

で、これは金が古くなり腐蝕し錆びついてゆくのを火によって鍛え直し、これを新たにすることの象をなす。そしてこの睽卦の逆である離下兌上三三の卦は革なのであるから、まさにこの新しくするの象にぴったりである。ところでこの革つまり一新する必要が特にあるのは兵であり、用兵の要諦は古きものを除去しては新たなものを採用することと存するから、昔から今に至るまでの武器の変化に即応してゆくことの重要なのは贅言を要せぬところである、まさに急務というべきものは大きな礮艦を備えることになろう。⁷⁹⁾

また二爻が陰に變ずると震卦を含むことについては既述したが、これに対応して表の卦である離上震下三三の卦たる噬嗑とその逆の離下震上の卦三三豊とも関わることになり、この噬嗑、豊はいずれも易经象に出る如く刑獄の象をもつので、これにも現われてくるのである。

さて、離卦は既に説卦伝でも説かれているように日であり、外を剛爻が蔽っているので中は空虚であるから孚でもあるが、五に陰爻が、二に陽爻がきているので巳日を意味し、これに終っているのである。離卦はその第二爻を陽に變ずると乾卦三を得るに至るが乾は虞氏の易が善として好んだものであり、誉の象をなすのである。また、これは互いに兌の逆卦たる三巽を含むが、この巽は説卦伝第五章で述べられるように方向は東南、季節においては春であって造物主が万物を齊え生物鮮かに整う時をなすのである。巽はまた説卦伝第十一章に巽為繩直といわれ、人を正す命令の意味をもつので誉の象と合して、まこと誉命の象なのである。⁸⁰⁾

最後の上九は六五で述べられたように離火によって長い間に錆び腐蝕した古い金を革めねばならぬのに、どうも思うようにゆかぬ根拠を示している。⁸¹⁾ というのも、これは第三爻と応じているからである。既にふれたように第三爻には思い上りの象があったが、それは離變じて震となり、ために眇視跛履の形をなすからであった。⁸²⁾ この震の逆卦は艮

卦三であるが、艮は説卦伝第九章にも為手とあり、このため手で抑え止める、つまりは執着の義が生ずるのである。⁽⁸³⁾

だから上九は陰位に陽爻あり、位に当らぬので睽乖の極にあるがゆえに革を必要としながらも反戾執滞の象があることになる。⁽⁸⁴⁾ こうして象山は初九より上九に至るまで、それぞれの爻について、その象を本文記述のように解した根拠を、その中に含まれる逆卦をあわせて決してただ一時の思いつきによるものでなく、まこと易理にたつた西洋芸術の結実たる礲包撰の論であることを縦横に易の知識を駆使して後記⁽⁸⁵⁾において述べ畢ることになるのである。

扱て以上で省魯録礲卦二者に見られる象山の所説を概括的に辿ったが、その特色ともいべきものは伝統的な朱子学的価値観を大枠とした、自主的経験とりわけ洋学との邂逅といった異種体験の山陽的用複合体を媒介とした拡張的な独自の定位論理に存したといえよう。象山はこれらの著述を通じて、彼れも人、我れも人、従って天は人の上に人を作らず、人の下に人を造らないといった平等性を軸にした、極めて個性的な兩是の論理をくりひろげ、これによって西洋の芸術を東洋の道徳と相並ぶものとして包摂したのであった。この兩是こそ彼が礲卦後記でみせた周到なさまざまの卦変でみせた、あらゆる可能性を検討してゆく総合的思考つまり片側通行ではなく、逆のことにも配慮を怠らぬ両面の勘案と軌を一にするものであった。このいわば二項的な構造化をふまえた発想が司馬法の兩是をとりあげ、これに新しい息吹きを吹きこみ、西洋の想念を洋儒・西儒として我邦の儒と同一次元におかせ、また天人合応の理を利用することによって後述するように格物致知にも従来とは一味違った意味づけを可能にしたのであった。つまり自主的経験をその個閉塞的な日本の想念景況にあって道より屈折させることによって定位することになった山陽的な用複合体は実の用をスペクトラム的に配列するとともにこれに悖道的な色彩を与え、元来ディアレクティケを内在せしめている、用複合体の一つの反射を萎縮させた。そこに後述するように、用複合体のスペクトラム自体が道より

の方向だけをクローズアップし、ために実の定位つまり異種体験を組み込むに際しての狭隘さを露呈し、再編をめぐって動搖を見せる素因が存したのである。

象山はここで洋書を読むといった、極めて異種な体験、かかる自主的経験の定位にあたつて、この朱子学的な経験定位をその原点に立ち戻つて総ざらえし、用複合体に内在する弁証法を活用するため、従来ばかり、ややもすると後景化していた道へのヴェクトルに照射照明の光をあてて、道よりの方向との出会いの場が、これまでの経験定位の枠である用複合体とみるのである。また、これは同時に天人合応の理にたつて、人事の天への無限接近によつて、より完成度を高めてゆく運動の中に定位さるべきものであった。これが、この二著所説で示された両是の一是の論であり、これこそ象山に山陽的用複合体の再編を許し、日本における洋学包摂のパターンを形成したものである。両是の一是という天の自己同一的弁証法そこに象山所説の根幹があったと帰結してよいであらう。作業仮説で提示したことはかかる象山所説の展開を迎えることによつて、このようにもっと具体的な形をとることになった。そこで象山所説の意味解析を行ない、何故かく言い得るのか、その所以、根拠についてみることにしたい。

Ⅲ 象山所説の意味解析

象山自身自らはつきりと述べているところではないにしても、極めて個性的であり、どこまでも独自のものを打ち出そうとした彼がその自主的経験定位に際して山陽的な用複合体形成をふまえていたことは十分に推測できる。^{①②}

既述したように山陽的用複合体は山陽の特に父春水との世代的不連続による私的経験の定位が原点となつておりそ

れゆえに公化のため殊更道よりの方向を強調するものであったことはそのスペクトラム形成にも覗い得るところである。このため朱子学を粹として、その道を日本的想念構図の基底的な作動によって皇道に拡げながらも、在来の幕藩体制との関連は片ヴェクトル上に配列される同じ既知値と考えられたため極めて漠としたものであった。つまり既知としては同質でありながら範疇的、領域的には広狭として観念されるからである。それは山陽が自らの経験をかかるとの体系をつくり上げて安住させたのと裏腹にそれぞれ閉鎖的な片側のみの独善的自己主張を胚胎させる矛盾したものを中に含んでいたといつてよい。山陽自身松平定信同様自らを陪臣と考え幕府が臣としての本義に立ち戻れることを望んだ公武合体に連なる体制順応論者であつたが、公武合体という発想そのものは明らかに縦断横断垂直水平の異なつた把握が可能であるだけに始めから山陽的な体系にとつて手にあまるものであつた。だから体制としての幕府が鎖国の祖法を楯にとつて異学の禁によつて思想統制にのり出し、一層閉鎖的な態度をうち出した時公—武はその距りを増したのであり、そこに山陽の弟子たちに見られる世代の差以外の分立が生じた理由も存する。

さて、このような山陽的な用複合体形成を媒介とした体系構築はその原点が山陽の反所与的な私的自主経験の組み込みにあつたため、山陽に象山も読んだ边防諸策といった外夷に備えるための国防論はあつたとはいえ、専ら国内経済体制の変化によつて生じた追いつめられた民衆を救済しようという悲願にたつていた。やがて老中水野忠邦によつて展開される天保十二年五月十五日より始まる天保の改革に見られる対内的危機対応という側面に傾斜するものであつたといえよう。だが、幕藩体制の苦悶は一八三〇年代に早くも一連の外庄がこれまでとは異なつた様相を帯びたため内庄外庄の關係が内主外従より内従外主と變つたことで層一層深まることになつた。これが既に公武に距たりを生ぜしめていた状況に加わることになり、公は武と同質の閉鎖性に立ちながらも武が現実を示す一層の閉鎖性にいら

だちを増すことになっていたのである。

ところで、天保八年六月二十八日日本漂流民をのせた米商船モリソン号を文政の打払令によって浦賀奉行が撃退したいわゆるモリソン号事件は前述した外庄の外主への転回点となった。幕府は翌年六月漂流民をオランダ船によって日本に送還するという打払令の緩和策をとらざるを得なくなったからである。^⑧

また天保十一年から十三年にかけて、ある程度まで日本の模範であった中国が貪欲さと悪辣さをむき出しにし、不正且つ恥さらしな戦いを仕掛けたイギリスの圧倒的な軍事力の前に脆くも崩れ去った阿片戦争はまざまざと東洋と西洋の格差を見せつけ、まさに天地開闢以来未曾有の珍事として我が国朝野に衝撃的な驚きを与えた。^⑩

天保八年既にブリストル・ニューヨーク間を十六日で航行できる千二百三十噸の大洋航路汽船グレート・ウェスターン号をもち、数十門の砲を積載した三千噸近い鉄製軍艦で七つの海にのり出していた西洋と未だ木造帆船の域を脱せぬ日本との出会いがこれだったのである。既に硬直化した閉鎖性を基軸とした公武の分立を帶有するに至っていた山陽的な用複合体はこういった状況にあって全く異種であり、従って驚きでもあった経験と始めて直接に対面することになった。従来日本にとつての異種体験は朝鮮半島を経由して齎らされていたが今回は嘉永六年におけるペリー艦隊の浦賀来航に見る如くぢかなものであった。これまで半島よりの異性体に対しての抗体を土台にして免疫体質をつくり上げることに慣れた日本にとつて抗体形成と免疫化の二つの操作を同時に行わねばならなかったため、この異種体験は極めて異様であり、だからこそ衝撃だったのである。^⑫

寛政異学の禁によって正学とされた日本朱子学は、この異種体験をこれまでの蓄積たる用複合体の抗体を利して免疫同化することになるのである。この異文化摂取にあたっての伝統的なパターンがここでも作動し、真に異なるもの

としての、西洋の全面的検討が阻まれたところに日本想念にとつての不幸があつたともいえる。だがそれはそれとして、こういった抗体を働かせねばならなかつたことを通じて、未だ底流として意識化されるまでに至つていなかつた公武の分立をここで意識の闕にのせることになるのである。勿論、免疫化のねらいは生体そのものの保持にある以上想念のそれも個人、社会の存続にねらいのあることは言うまでもない。広い意味での攘夷こそかかるマクロファージ細胞作動の帰結に他ならない。だが、これをいかに行なうかという具体的な方法で、この公武の分立が多様な組み合わせの可能性を生ぜしめ、その中から武よりの距だりを意識した公は範疇的に広いがゆゑに山陽よりも一步踏み込んだ幕藩的武の体制を否定する改革に力点をおいた構造改革路線^⑭によつて尊王の旗幟を山陽の第三子鴨屋にみられる如く鮮明に掲げ、社会体の保持をめざす志向が前景化してくるのである。他方幕府また鎖国を祖法とする限り、攘夷なのであり、文政の打払令はその証左をなすものであつた。併し、俗界的な皇帝大君^⑮の府として外庄の矢面にたち、モリソン号事件に見る如く、打払令の緩和ともいふべき措置を講じて、現実的に狭義の攘夷を修正せざるを得なかつたが、ペリーの来航はこれに一大衝撃を加えることになつた。

嘉永六年六月三日大統領フィルモアの友好通商、石炭食糧の供給、アメリカ難破民の保護を求める將軍宛ての国書を携え、これに対する回答を得るため約三千五百噸の鉄張り蒸氣船旗艦サクスエハナを含む艦隊を率いたペリーが江戸湾に現われたのである。そこには阿片戦争で見られた彼我の軍事力の差があつた。幕府の遷延策も空しく、強力な征服艦隊の圧倒的な武力示威の前に大君の政府はアメリカの力に屈し、祖法たる鎖国を自らの手で破つて安政元年三月三日日米和親条約十二箇条下田追加条約十三箇条を結び英露蘭にも門戸を開きいわゆる苟安的開国に踏みきらざるを得なくなつたのである。^⑯而も開国なら開国で、そこにより高い攘夷のねらいをもつべきにも拘らず、医書でない

と濫りに洋書も購入できぬといった厳しい言論統制を行なうことで洋学を抑えるという矛盾した態度のために象山がハリスとの折衝案に関する幕府宛上書稿で示したように万国公法の理も全く知らぬ、孺児同様の幕吏しかいないという惨状をさらしたのである。まさに相手のなすままであり、文字通り戦なき戦いに無条件降伏をしたと同じ屈辱的な城下の盟だったのである。幕府は自らの手で自らの祖法をすら守れぬといった無力さを暴露したのであった。武より
の距たりを潜勢的に感知していた朝権たる公がここで舞台に登場するのである。尊王はこの幕府祖法たる低次狭義の攘夷を肩代りし、そこに多くの組み合わせを底流としながら、尊王攘夷となり、これがその後の諸現実の動きと絡み合つて、倒幕の二字が加えられるに至るのである。ただ、ここで注目せねばならぬことは攘夷そのものが差し当つては低次狭義の現状での打ち払い的なものであり、これをなし得ぬ幕府に代つて朝権が行なうと考えられていたことであつて攘夷の質において何らの変更がなかったことである。このため尊王はその基底において佐幕であり、ただ幕府はもつと朝廷を尊敬すべきであるといった同心円の広狭に基ずく「より多く」が志向されており、それ自体としては幕藩体制の改良路線として直ちに倒幕に連なるものをもち合わせぬ公武合体に根ざすものだったのである。それは陪臣たる幕臣たちの尊王だったわけである。だが、諸般の状況推移の中で象山などに見られる如く攘夷は次第に開国的な攘夷といったより高次、広義また本来的なものに変化し、これとともに尊王もまた倒幕へ傾斜していった。これが五箇条の御誓文にみる富国強兵の明治だったといえよう。だが差し当つては低次狭義の攘夷論を作出し、この担当者として公を武より分出させたものが、山陽的用復合体のみせた限界だったわけである。そしてこの外圧による夷俗夷情との衝撃的な出会いによつてはしなくも限界をさらけ出した日本朱子学的用復合体の特殊山陽的な図式、この分立を止揚し、用復合体の再編成をはかったところに佐久間象山想念体系の功罪が存するのである。次により具体的にこ

①⑦

①⑧

①⑨

②⑩

の点をみてゆくことにしよう。

象山が朱子学的な「正学」伝統に終始たって、格物致知の方法を継承して窮理を主張していたことは所説展開の項でふれた通りである。彼はその自主的経験論の組み込みに当って日本的朱子学の作動構図である用複合体をふまえていた。象山は自分の想念体系の枠組みとしてかかる山陽的な用複合体を利用したといえよう。だが既述したように山陽にあって、自主経験定位のための用複合体構成の原点はあくまでも私的なものであり、これが経験包摂に際して限局性を帶有させ、道からの志向に傾斜させる基因をなすことになった。これが山陽の弟子たちに見る分立を公武の距たりの関数として胚胎させたのである。特に阿片戦争の衝撃吸収はその手にあまるものであった。この戦争によって文字通り、おどろきを体験した象山の課題は差し当ってかかる用複合体が東洋の思想とは異った相貌を呈する洋学包摂にたえるものかどうかの点検であった。西洋の斬新な発想を用複合体は果して別物として己れの中に組み込み得ぬものであろうか。用複体のいわば隠されたモメントを救済することによって拡張し得ぬものであろうか。これが宋氏風論も読んで喜び得るに至るまでの象山模索の旅の零料標であった。象山に三十二才にして江川坦庵の門を叩かせ西洋砲術を学ばせるに至った阿片戦争ショックは彼が正学と奉じていた程朱純粹の学の日本の理解を支えていたかかる用複合体への衝撃でもあったからである。確かに西欧は本質的に異質な想念体系である。だから、文字通り彼を知るに徹すれば終始一貫して異質なものの把握を保ち続け、異ったところを構造的に、西欧内在的に理解し、彼等の優劣をそこでより客観的につかむのが正道だったのである。だが、この道を辿った者は残念乍ら皆無であった。西欧の想念を別物とみる考え方は西欧へのオフ・リミットを主張するものであり、象山にしても後述するようにその異を実学的なものに限局するのであって、ともに西欧想念に外在的な土着思想の其と豆であったからである。象山はこ

れまで禁断であつた西欧の想念に足踏み入れるに際して、いわば咒文として用複合体を始めから前提としていたのである。だから、洋学の摂取において積極的でありながら、ただそれだけの差であり、結局同工異曲のものとして、退嬰的な別視をそのまま進取的なものに転じさせる力をもたず極端に言うならばすりかえはぐらかした論だったのである。そこに彼の言がなかなか容れられなかった一因も潜んでいたといえよう。だが、それはそれとして、かかる経緯をみれば明白なように伝統的な用複合体を前提として、そこに秘められているモメントを救済し、前面化してゆくことで本質的には異なつたものである原罪観を基底にした、構造性を個トポスにおいて有する西欧的想念体系をかかる拡張再編された用複合体に定位嵌合することになつたのが象山の体系だったのである。泰西の学を菜肉孔子の教えを食に譬え孰れか菜肉をもつてその味を損ふべしとするやとし、泰西の学行わるれば孔子の教益々その資を得るに相違なしと断じ以つて泰西の学により孔孟の教失わるとする考えを自ら孔聖鄒叟の徒として他の學術技芸を媚嫉する者の説であるとして排したことはこの端的な証左であつた。これこそ易理をふまえた礲卦の体系だったのである。

ところで、山陽的用複合体は道よりの志向を卓越させたとはいつても、もともと複合体であり道の実用といつた二つのヴェクトルが作動する場であり、二項的な構造性に近似したものを具有していた。これらの二つはまた道よりのヴェクトルと道へのヴェクトルとも言ひ直すこともできよう。だが、この二つを関連づける事自体が既に私が論じているように二つの一つというアポリアを形づくつてきた。従つて、二面二側面をとりだしても植手通有氏が述べられる如くどちらかに傾かざるを得なくなるのである。ここにかかる用複合体にたつた山陽の尊王論が理想的存在たるべく努力すべき天子像を描きながら実の用がもつ悖道性を前面化し、そのスペクトラムをつくることによって、明治の体制整備とともに脚光を浴び舞台にてでくる絶對的に無謬な天皇観をその基底に既に帶有するに至る基因が存した

といえよう。山陽にあって確かに複合体として道へのベクトルはあったが、それはかかる観念操作を経て道よりのベクトルの前に萎縮し、点線化されてやがては吸収されてしまっていた。

象山の救済したものはこれであった。彼はかかる事実上の切り捨てが、分立の基因をなす閉鎖性に連なることを看破した。彼にとつての拡張はただ道よりのベクトルが主役を演じている景況にある用複合体を外延的にのみ拡げることではなかった。これでは洋学の組み込みは不可能である。洋学の摂取を行ない得るには、洋学の異性体性を実学に限定するとともに、その基底にある二項構造化の未完を利して、既に我邦のもつものとの近似性を前面に出し、これを免疫同化の梃子とする必要があった。つまりは用複合体がまさに複合体として作動している事を弁疏せねばならなかったのである。かかる意味で用複合体にその閉鎖的な偏向性を止揚して新しい風を吹き込むことが不可避だったわけである。このためには、山陽的用複合体をその原点において作動させ、道よりの慣性的なベクトルに対して道へのベクトルを実線化せねばならなかったのである。このような慣性の逆転こそ象山のねらいであった。砲術を学びながら秘伝を固守する江川坦庵を批判し、自らは開放的に処したのも、このためだったのである。象山はこの一方通行的な道よりのベクトルのヒュブリスに世人の閉鎖性のハイマートを探りあてたといつてよい。彼はこの観点にたつて我が邦儒者たちの固定的解釈を批判し、未だ知られないものがあるのに、これに着目せず、まさに迂濶の甚しきに陥っていると指摘する。^{③③}これは孔孟の道すら、片ベクトルにしかとらえず、逆のアプローチの可能性を見ようともせぬ、真の格物致知を欠いた彼らの勉強不足への痛烈な言でもある。^{③④}

こうして象山は山陽的用複合体でともすれば埋没しがちであった道へのベクトルを、道からのベクトル卓越のためこれまた演进的であった格物致知を帰納的なものに転換しながら前面化したといえよう。いわば用複合体に弁証

法的な体系を与えたとも見得るのである。これが司馬法の兩是に象山が付した意味だったわけである。つまり、そこに彼も人、我れも人、ともに正鵠を尚ぶといった発想の具体的な意義が存するのである。というのもこのヘーゲル弁証法^②と現象的表見的に相似した構造化を軸にして、西欧想念の異相性を実学にのみ限定し、これを支える根はかかる構造化において共通であり、而も既に用復合体伝統としては我れにあつて先き取りされているとみるからである。現象としては彼我れに優れるとも根は既に我れのものそして特にこの後者の強調、これが敢えて禁断の域に足を踏み入れ、洋学の立脚次元を道へのヴェクトルである反立におき、その接受を可能にしたものだったのである。

象山が泰西の学行はるれば孔子の教え、また益々その資を得んといった時、その基底にはまさに彼も人、我れも人、天は人の上に人をつくらず、人の下に人を作らずといった天の同心円的な認識に立って、格物窮理への格物致知の転換、理の二面性的な把握、かかる意味での兩是の論理を駆使して、道からのものも、また道へのものも共に道を共軌項としている以上同質であり、かかる道は天道として易理に反映され、既に孔子の説いたものであるとの考えがあったといえよう。既に引用した門人小林虎三郎に宛てた尺牘はこの間の事情をよく現わしている。^③西洋所發明許多學術 要皆実理として泰西の学がすぐれているのは実理の窮理であり、これに対して吾が聖学たる孔子の教えは道理を窮むるにおいて他の追隨を許さぬ。彼は実理、我れは道理にすぐれるが、またその反面彼は道理我れは実理に劣るのである。象山がハリスとの折衝案に関する幕府宛上書稿で西洋諸国において果して天地公共の道理を奉行し候はばとし、阿片戦争で英国はかかる道理を奉行し候とは申すべからずと述べた背景にはこういった考えが潜んでいたとは言えないであらうか。同じく窮むる理として彼には実理我れには道理があり、それぞれの特質をもち、彼の学は菜肉たる芸術 我れの教えは食たるの道德として兩立しながら相補い、相助け合いつつ理としては一つであるとみるわけ

である。^{④①}つまり理にも道理Ⅱ実理Ⅱ理といった一種の自己同一的弁証法によって理に傾斜する主知的な用複合体の体系化を行ない、これによって西洋の学の摂取を可能にしたのである。まさにかかる意味における山陽的用複合体の再編こそ象山にとって洋学組み込みの基底をなすものであったといえよう。象山も恐らくは実理と道理、実と道に化体される、その異の象面に目を向け西洋と東洋の学それぞれの示す異質性と遭遇し、それとの心の対決を彼なりに経なければならなかったことについては既に指摘した。これが例の読宋氏風論喜而作の詩に垣間みられた苦悶の軌跡であった。だが、ヘーゲルのなまきに西欧的な弁証法と全く無縁であった象山は射者雖殊科 所尚在正鵠と理の同一性を向け、この同心円的な同質化を楨杆として異質性を弁証法的な動きの中で止揚さるべき経過性と限定的にとることによって、この苦悶から脱け出すことになるのである。そこには二つを一つにする曰く言い難き、潜在的な弁証法の作動があったのである。つまり、彼は実理・道理を理で絞ることによって、一種の Synthese を得たのであり、この理に想到した時、まさしく冥符を獲て吾が心頓みに慰抚し喜びを味わい得たのである。^{④②}だが、これがあくまでも個閉塞伝統にたった用複合体の自己同一的な弁証法でしかなかったため、主体と客体の構造把握に基ずくヘーゲルのそれとは無縁であり、これが、道理と実理を併せ、この相補性によって聖賢の道に未嘗識の理を導入し、未だ他国の知らざる所を得て小国日本が国力を蓄積して西洋諸国に遙かに優れたものとなる要諦であるとはしながらも、象山の体系に土着的な刻印を捺し、限界づけたものだったのである。そこにはまた漢学たる朱子学の受容に当って用複合体を形成させ、これを媒介として他文化を現象次元と化し、自らの本質に触れさせぬ日本的想念構図の作動が見られるのである。だから、こういった総合としての理は象山が用複合体にあって救済した道へのヴェクトルにのって天に、より完全なものに近接してゆくといった、若干コーシー的な極限値着想に^{④③}近いまさに新しいものの芽を帶有しながら、

その新しさを本質的に掘り下げず、道理と実理二つを包み込んだこの体系自体が兩是をなすものであって既に司馬法に見られるものとなし、その構造近似的な作動現象のままに既知値として観念する結果となるのである。この意味において、かかる第三の道理Ⅱ実理Ⅱ理の理は物理を基底にした天理であり、それはまた礲卦で広く且つ大なりと語られている易理で示されるものだったといえよう。確かに、この弁証法的な思惟といい、格物致知の帰納法的な把握といい、西洋想念の中核に迫るものをもっていた象山はまた自然科学的な面で当時としては極めて実証的合理的な人であり、主体的操作性を前提とした近代の実験的精神を萌芽的ながら示していた。だが、それにも拘らず西洋の自然科学が占候や卜筮を否定しているのを承知した上で最後まで天変地異が社会異変の兆を示すという見方を捨て去らず、また例えば安政四年未より始まる日米通商条約締結とか元治元年公武合体派と尊王攘夷派との対立が切迫する時期のように深刻な政治危機を意識するたびに占筮によってその脱出と克服法を探るなど、およそ科学的合理主義者らしくらぬ行動をもみせているのである。また道理と実理を理の展開の中に探りあてながら、そこで獲られた冥府は理であり、結局はヘーゲルのように異に照射をあてた定立、反定立ではなく同の契機を抽象的な理の共軌性によって強調し、天下之事に兩是、兩非としては無之必ず一是のみにて候として用復合体全体としての天への接近を思い描き、大学の格物、中庸の明善、易の窮理・洪範の皇極皆其事にて御座候の言にも知られる如く、自己同一的弁証法を構成し、本質的に異質な西欧想念体系の摂取を、かかる理の一枝として自然科学的領域に局限しつつ程朱の伊川易伝、周易本義の中に位置づけるのである。こうして道理と実道はまさに易の窮理という表現が語る如く格物窮理によって易理たる人道として天に接近してゆくものと観念するのである。この用復合体の作動を媒介にしてのかかる洋学の現象化、こゝによって既に道理にたった東洋は西洋想念の摂受があっても聊かも揺がず却って強められるとさえ見るのである。

だから、植手通有氏が指摘されているように象山は敵を知る必要上西洋諸国の制度や風俗慣習に探索の眼を向け、既に引用した安政三年七月十日勝海舟宛書柬、文久三年戊九月時政に関する幕府宛上書稿に見られるように西洋の学校制度や貿易理財面に若干の考慮が払われたにしても社会政治体制の面で西洋文明に言及することが極く稀れになるのである。^{⑤1}勿論、象山として幕藩体制の動搖が大きくなり、社会的経済的な矛盾がまた飛躍的に増大してゆく現状に無関心でいられたわけはなく、^{⑤2}西欧と東洋とはそれぞれ長じた実理と道理を活かし、その相乗効果によっていわばケインズのな乗数理論的洞察にたつて、短を補い長をのぼすといった分限を守ることこそ緊急肝要事とみたすべきであろう。時政に関する幕府宛上書稿にある陪臣の身も憚らず、敢えて皇国当今の御形勢は全く漢土三代封建の制にならつて道德、仁義孝悌忠信等教は尽く漢土聖人の模訓に従い天文地理、航海、測量、万物の窮理、砲兵の技、商法、医術器械工作等は皆西洋を主とし五世界の所長を集めて皇国の大学問を成し以て上は宸襟を被為安下は万民安堵致候様上様にも御発憤被為在在来の弊風を御一洗なさるよう進言するとの条りはまさにその端的な現われであった。そこには洋学こそがそのれを捨て人に従い、人にとって善をなす道を開き、^{⑤4}却って本邦の封建制を強化し、その危機を救うに資するとの考えが覗いているといえよう。だから、社会秩序を天地自然の秩序として捉える自然秩序思想が保持され、社会秩序を人によって変革するという作為の契機を帶有せぬ社会政治体制変革の眼を欠落させた社会観の弱さ^{⑤6}に帰すべきものというよりは寧ろ、それぞれ西洋と東洋とは分限を守り相補うべきだという漢学摂取において既に働いていた用複合体を形成し、これを媒介として異文化を受容してゆく日本の想念構図がここでも作動し、その道理Ⅱ実理Ⅱ理の潜在的弁証法とこの総合的な人の理が天理に人の理の方から近接してゆくといった象山独自の体系にその責めがあるというべきであらう。つまり、実としての分をもつ洋学はその異性体性を極く狭く限定され、その底での

根の同一性が積極的に東洋的な易理によって強調されたところに象山にとって封建的な上下秩序は空氣のように既定の公理であり、始めから金甌無欠性を具有し得た所以があるのである。こうして内にあって、封建的な階層秩序を天地自然の“道理”と考え幕藩体制を自己同一的弁証法による公武の合体といった合力的な構造改革で再編強化すべきだとした象山は外に対しても先ず他国に喰われぬように総力を結集して本邦をまこと世界一の強国に育て上げ、やがては植民地をも持つべきだといった国際秩序にあつても力に基^{⑥⑦}ずく支配、被支配という意味における上下秩序しかあり得ぬとみて、なお、そこに華夷思想の名残りを留めるのである。省警録雜説条三十三は文王の美にして誰謂王者不尚力耶と述べ、力による上下秩序を尚うべきことを強調しているのはこの証左とみるべきであらう。

ところで、この尚武という力の論理はまた一つの見方をとると東洋の道德つまり道理に対して西洋芸術の実理に近いものである。その限りにおいて道德をもつて政治の要諦とする儒学思想、中国流の道德の論理とは現象的表見的に昵まぬものをもつのは慥かである。そこから本郷隆盛氏が説かれる如く我が国における忠誠觀念に認められる儒教的契機と武士道的契機の相違並びにその相互関連をとりあげ、儒学の素養を身につけ科擧の試験を通つた讀書人に中国支配階級の根幹を見つけこれに対して近世幕藩制国家でのそれは神武を第一義とした、戦闘を本来の職業とする武士軍人でありために道德による儒学思想を補強材として文武一致を口では唱えながらも武の優位に傾斜しがちであつた武士道に力の淵源を求め、西洋流の力の論理との共軌性を探りあて、ここにその洋学摂取の基底を尋ねあてる発想が生れてくるのである。^{⑥⑧}阿片戦争による衝撃のもとで砲術にいやでも関心を向けざるを得なくなり、その原書による修得という西欧想念体系の支柱への接近を見せた象山に對外的危機にあたつて、かかる武士本来の戦闘者としての魂の覚醒があつたことは否定すべくもない事実であつた。慥かに象山の西洋科学技術の導入には皇国を西洋諸国と對抗さ

せるというねらいがあった。蘭学に対する彼の取り組みには武士的軍事的な精神の規定性が働いていた。⁶⁰象山の中にある武士の魂は例えば凡武士たるもの出入往来に常に刀剣を帶し候事は別義には無之能其身を守護し、諸般の乱逆をしづむる故にて御座候と武士の覚悟を論じた大日方某に与えた書で明白に窺えよう。⁶¹彼象山に武士道的な諫奏の精神が非合理的・能動的な忠誠のエートスとして働き陪臣の身にも拘らず敢えて皇朝のため思出位言踰分ようにさせた、この武士的な実践的能動性が、朱子学と無縁ともいえる象山の実験的精神に主体的な操作性を賦与したとも考えられるのである。⁶²

だが、尚武にふれた省魯録雜說条三十三は象山の加筆があるにせよ書経の引用であり象山自身儒学の枠において述べているとみることができるのである。だから、象山での武士の魂は儒学とは別に働いていたのではなくこれを媒介として黒衣の役割を果たしていたのであって、これを洋学摂受の直接的基底とみるのは少し無理なように感んぜられる。武士の魂は儒学と同居していたといえよう。⁶⁴象山において武士の魂と牽連するといわれる西洋近代の自然科学は朱子学の格物窮理を媒介として理解され摂取された。⁶⁵葉隠的な日本の尚武の伝統にたつ武士道は、異文化の摂受にあたって形成される用複合体の構造性が西欧想念体系の異性体的性格を支える個人ポストより切り離された時、それが帶有する二項的構造性と酷似した作動を見せるため、異を実学性にのみ限定して残しつつ、同根と考えさせるのである。かかる用複合体を媒介として働かせることで洋学の摂受を可能にするのである。こういった西欧よりみれば根無し草的な構造性に西欧の日本での同化のメカニズムが存したといつてよいであろう。特に象山がその実験的な精神で近代的な西欧に近いものをもっていたことは蘭書によりながらも帰納法に準ずるものを既述したようにつかんでいることなどを勘案すると根なしとはいえず、西欧的な構造性をかなりの確にとらえていただけに首肯できるところだとい

えよう。

要約するならば、道・理と実・理を道と実といった異った側面を強調するよりは寧ろ共通している理である曰く言い難き統一体として易理による、自己同一的なかかる弁証法によって用複合体を再編成した象山はまたここでも朱子学という己れの正学を粹として日本の武士道をこういった用複合体の中に包摂したのである。儒学的精神と武士の魂は無媒介に結びつくのではなくて、個閉塞的景況下にあつてかかる用複合体を介在させ武士道⁶⁶程朱の学⁶⁷皇国の道といった展開軌跡を支える自己同一的な同心円にたつた日本の想念構図の潜勢的作動によってそれぞれ用複合体の中で両是の一肢としてその処を得るのである。

山陽にあつて体系化への歩みを踏み出した日本的なかかる同心円の想念構図の所産である用複合体は象山によって、東洋に数段まさる西洋を前にして、象山自身意識することはなかったにしても、こういった弁証法的構造性を与えられ更には福澤諭吉にも連なる日本における異文化特にすぐれて異なつた性格を有する洋学摂取のパターンをこの構造賦与という大転回によって措定するに至つたといえよう。そこに象山想念体系の功罪すべてが存するのである。

“完”

注

- ① 宮本 p・696～p・705
- ② 宮本 p・696 叙の一 p・696～p・697 叙の二 p・697～p・703 本文 p・703～p・705 後記となっている。
- ③ 宮本 p・696 予先君淡水先生好周易 毎夕読之 必畢一兩卦而後就寢 故予二三歲時 既能耳熟 誦六十四卦名 易への言及は例えば宮本 p・36～p・37 読宋氏風論喜而作の吾年十有五 読易象山麓 玄夜玩辞象 p・305 周易

の大戒 p・396 易の文字をとり一名王庭とも呼び候わんと p・401 当今之御時勢を以て易卦に取り候えは盡の卦に当り候と奉存候 p・838~p・839 川路聖謨が弘化三年奈良奉行になって赴任する時易に擬して寛の字義を説いて送別の辞とするなど枚挙に遑がないほどである。尚お 前掲注Ⅱ②参照

④ 宮本 p・696 稍長 受漢宋諸家易說而說 潛玩之久 乃若有得其要領焉 また、宮本 p・502にある如く二十三才の時 今は散佚しているが毛奇齡の春秋占筮書補正もある。

⑤ 本郷隆盛前坊洋稲田雅洋、近代日本の思想 (1) (以下本郷として引用) p・33~p・63

⑥ 宮本 p・146、151 長尺のカノン砲 最も砲身の短かいモルチール(臼砲)、中間の長さの砲ホウキッスルをそれぞれ地砲、天砲、人砲と砲身の長短によってよんでいる。これは筮法での天策地策人策の天地人三策に対応するとみてよいであろう。尚お、この天地人三策については高田真治、後藤基巳訳 易経上下(岩波文庫)上 p・48、62以下参照(以下高田として引用する) また、この隊伍訓練は宮本 p・681の操教である。

⑦ 宮本 p・154~p・155 なお更にp・597以下の及門録参照

⑧ 宮本 p・155~p・168 本郷 p・128~p・129 その講述内容については宮本 p・152~p・154の門弟島津文三郎宛ての免許状参照。これによると歩兵法、騎兵法、砲兵法となっており、宮本 p・681にある陣法有歩騎礮之別に対応する。

⑨ 宮本 p・168 なお p・859以下 嘉永五年夏礮卦を撰し、竹内錫命の批判を乞い、更に十月その伝並びに後記をかいて遂に脱稿完成とある。本郷 p・47では礮卦を西洋砲術の概説書ともいうべきものとするが、ただそれのみではない

⑩ 宮本 p・818 読洋書の詩参照

⑪ 宮本 p・36~p・37 吾年十有五 読易象山麓 玄夜玩辭象 或時至晨旭 冥会一何欣 理妙照心目 父老嗟其精友朋稱其確 巖々張夫子 為学眞卓卓 刻苦著正蒙 兩程互相勗 『顧彼巽風說 義類都未燭 如何在後賢 尊奉攀其躅 執異余二紀 往來在心曲 一朝獲冥符 吾心頓慰沃 射者雖殊科 所尚在正鵠 誰謂萬里遠 神系固相屬』特に『』に注目してもらいたい。なお、また宮本 p・495~p・497参照 ただこの文中の宋氏ソノメルについて宮本 p・131で白耳義人か佛蘭西人が確かなことは分らぬとしているのに対して植手 p・369 勝海舟宛安政三年七月十日書翰注で Noël Chomel でフランス人牧師の百科全書の著者その蘭訳本 Huisandelyk Woodenboek は幕末に珍重され幕府の天文方で厚生

新編と題して翻訳事業が進められたが未刊に終わったとする。また宮本 p・495とp・497によるとシヨメールの百科全書、ソンメル宇宙記、前者を弘化元年十六冊四十両、後者を嘉永三年三冊五十五両で購入した旨の記述があり、宋墨爾之書三帙 予以五十餘金購之 宮本 p・496 ソンメル宇宙記を宋氏宇宙記と記しているのでこのp・36の宋氏はシヨメールではなくてソンメルではなからうか。なお宮本 p・818では偶得宋氏書 宋墨爾氏 獨逸蘭士人 著書六帙 譯曰寰宇大觀とある。これを明確にする資料がないので断言は憚られるが、この宋氏はシヨメールとは別のソンメルのような気がする。だが、いずれにせよ洋書であり、その摂取定位の試みをこの詩が窺察させていることには変りはない。

⑫ 宮本 p・818、131、495と496 前注 参照

⑬ 宮本 p・300 守政五年三月六日付 梁川星巖宛て書柬 是非共司馬法に申す所の両是の手段に仕候の外無之奉有候此両是の術は古来兵法の第一義にて・またp・345 眞田幸教宛上申書中の是両之といふとも有之候。この両是こそ象山想念体系の一つの要をなすものであり、これが西欧的な二項関連構造式への親近性をもち、本郷 p・35とp・48 が指摘している西洋の内面的な認識を可能にすると同時に古来のものとして現象的にはあくまでも儒学の枠内にあるととらえさせたといいよい。本郷 p・39

⑭ 宮本 p・696 敘の一 なおこの相発するという表現は両是 更には宮本 p・743の脈絡の重視と連なるものをもち、またこういった準構造性ともいふべきものが構造の立脚する直のトポスたる個でとらえられていないため論理化が不十分となり、多方に情念的な前論理性を残していることを示している。だから、まさに不可言の妙なのである。この天人合応については省魯録雜説条十九、四十六 特に後者の嗚乎 予與魏・亦有開合者参照

⑮ 宮本 p・681 兵要 p・682 孫子説二則第一参照

⑯ 宮本 p・696 敘の二 予之講新畝法於江門 生徒稍盡譬 或有問於予曰・何卦当之

⑰ 宮本 p・696 叙の一 p・859 嘉永六年二月 山寺懼堂宛書柬で荻生徂徠の孫子國字解のようなものをその経伝において考えていた参照

⑱ この用語の意味 用複合体という表現については拙稿日本政記論賛所説の批判的考察参照

⑲ 宮本 p・696、697 夫々書干求是室 書干江門所居求是室参照

⑳ 高田 上 p・50とp・51 特に七のp・51L・6以下、また宮本 p・696 叙の二 聖人有作 順從風氣 不

先天以開物、各隨時而立政參照

②① 本田 濟 易上下(朝日新聞社 中国古典選 1、2 以下 本田として引用) 上 p・333 p・35 永田 久 曆と

占いの科学(新潮選書 以下永田として引用) 第十一章 八卦の論理參照

②② 宮本 p・696 絃の二 結繩以治弧矢以威 無非隨時焉者 當今之世 微銃礲 不足以制馭内外參照

②③ 宮本 p・697 夫易廣矣大矣參照

②④ ここに問題が存することになる。西欧の構造性は個内という本来的なあるべきトポスを有するのである。だから、個閉塞反射による日本朱子学体系に対してトポスのみにみると明らかに西欧概念は異物である。だから、これを別物とみなしてゆく水戸学的攘夷論の主張にそれ自体として誤りはない。併し、その排撃は西欧概念の地平に足を踏み入れての確認、トポスと構造の相即的体系としての異物認識にたつものではないところに弱点があった。そこに構造的な相似性によつた象山的な包摂論が提起されてくるハイマートがあることにもなる。だが彼もこの相似性を強調するあまり、トポスの厳然たる差をも、まさにトポスなるがゆえに霧化、エーテル化することになってしまう。西欧の異なることが逸らされてしまう、いわば行き過ぎを生ぜしめるのである。深く西欧を西欧自身の發展史より理解せぬ浅い西欧把握、そこに同一公分母による素数としてのすくみ状況をつくり出してゆく素因が存するのであり、これがまた象山への無理解と元治元年七月十一日の暗殺へと連なつてゆくのである。

②⑤ 宮本 p・697 如其易象 則弓矢睽也 礲亦睽也 p・697 礲之爲器 近古起于西洋 天文以後 漸盛於我 頃歲

新礲法來自荷蘭 器之製 用之具 術之法 至是而極精 また礲卦のこういった咎を避くるねらいについては p・696 俾無蹈危厲之地而自取其咎云 p・697 苟得此而玩心焉則庶乎其可以無大過矣參照

②⑥ 高田 上 p・697 p・70 なお義理については宮本 p・697 夫易廣矣大矣・亦未始不備其象也 礲卦の叙述は易經の体裁に大よそ準じている。

②⑦ 礲卦のこういった側面については植手、松浦ともにとりあげていないようである。恐らくは既掲の如く単なる砲術概説書であり、また易といった古いものとかかわりがあるので、触れなかったのであろう。私は元来西欧思想専門であり、易には全くの素人である。だが、こうした認識の上になつて敢えて大過を犯し、火中の栗を拾うの愚を承知の上でとりあげるに至つたのである。

②⑧ 宮本 p・697 既に引用した章句に続いて以言其遠則不禦 以言其邇則靜而正以言乎天地之間 則備矣 故達人物 横

日本における洋学摂取の一パターン(二)(高瀬)

四海亙古今 而無有乎不準 無有乎或違也 故未有卦画之前所有之物 其象固存乎易 已有卦画之後所有之物 其象亦存乎易 見易而制器卦固未始不備其象 未見易而制器 卦亦未始不備其象 なお象は六十四の象徴的な符号である卦についての説明、卦によって示されたものの形を意味するものである。本田 p・13、14 参照

- ②⑨ 宮本 p・697 前掲 注②引用の文に斯器雖後出 求諸易 其象與理 蓋既具于礲卦 觀其象而玩其理 不惟器之體用術之終始 與夫學焉者之利害得失 視諸掌上・如望日月 斯可以見易之妙矣とつづく。また礲卦は離卦三が上卦、兌卦三が下卦であるので、下卦兌の陰卦たる三巽 上卦離の陰卦たる三坎との組み合わせで離卦上巽卦下の鼎、坎卦上巽卦下の井がでることに触れて繫詞者二焉 曰井 曰鼎とする。

- ③⑩ 本田 p・111~p・15

- ③⑪ 易経の睽のところは高田 下 p・511~p・56 本田 下 p・591~p・67 参照

- ③⑫ 宮本 p・697~p・698 卦を掲げ、伝として爲卦上離下兌 所以爲礲 則取於其象 取於其義焉 取於其象者有二

・即礲也 なお弓矢の卦を睽とすることについては本田 下 p・317 高田 下 p・255、259 参照

- ③⑬ 高田 p・181~p・19 本田 p・12 乾兌離震巽坎艮坤の八卦にそれぞれ天澤火雷風(木)水(雨)山地が対応するとする。だが永田 p・211の五行との対応でみると乾兌は金離は火となる

- ③⑭ 宮本 p・698 取於其義 則火發於金口也 口有吐之義 礲之象也・稽諸卦象 冥如合符 易之爲書 廣大悉備 洵不誣矣 なお貅兕蒙礪はオランダ語の vuur と mond に該当する言葉の漢字表現であろう。

- ③⑮ 爻は卦をなす六本の棒の一つ一つを指す。六つあるので六爻 数える時は下からであり、また一を陽爻又剛爻一を陰爻或いは柔爻といひ奇数を九、偶数を六で代表させ、それぞれ初九、九二、九三、九四、九五、上九とよぶ。また奇数は陽、偶数は陰であるから初、二、五は陽位。二、四、六は陰位である。この陽位に陽爻がくると正を得るとか位に当たるとかいわれる。その他、卦爻の徳、応、比、承乗、時、時義、時用、吉、无、咎、悔、吝、凶、中などの用語については本田 上 p・331~p・335の解説参照

- ③⑯ 本田 p・14 大象は卦全体の説明であつて象伝と重複するが六爻を三爻ずつの八卦に還元して八卦の象徴する雷、風などの組み合わせでみるものである。象山の象伝はまさにそういった説明といつてよい。

- ③⑰ 宮本 p・698 象曰 礲睽也 火輶而上 金重而下 二物之性 睽而不相濟

③⑧ 宮本 p・698 伝 是釋卦義也・火則厭之 金則飛之 宜上而下 宜下而上亦爲賤義 凡礙之事 莫不以賤爲用 雖正而不免危 蓋由是也

③⑨ 高田 上 p・34 三才の位の説明参照 占筮に際して略筮法では左手に握った天策を二本ずつ四度数えて下半分の内卦、上半分の外卦を得て大成の卦を現わすが変爻がないので左手の天策を二本ずつ三度数えて得るこの時右手にもつのが地策であり、机にのせて中の一本を抜き取って左手の小指と薬指の間に挟むのが人策であって、三才とはこれをいうのである。また大成の卦が卦の義 変爻つまり爻位が卦の才なのである。なお占筮法については高田 上 p・62以下 本田 上 p・24以下 参照

④⑩ 高田 下 p・171以下 上 p・261以下 本田 下 p・208以下 上 p・268以下 永田 p・204
なお、説卦伝でそれぞれ故曰説言乎兌 離也者明也とする 高田 下 p・291以下 p・292 本田 下 p・345以下 355

④⑪ 宮本 p・699 易經本文 説卦伝などをアレンジしてこう表現する

④⑫ 高田 上 p・36 本田 上 p・33

④⑬ 宮本 p・699 六五以柔居主位 有説順文明之善 又得中道 而以剛爲用 可謂君子矣 是足以合其賤而濟 吉而无咎 不亦宜乎

④⑭ 宮本 p・699

④⑮ 福永武司 老子 上・下(朝日新聞社中国古典選 10・11)この原文は上 p・248 第三十六章 将欲歎之 必固張之 将欲弱之 必固強之 将欲廢之 必固興之 将欲奪之 必固與之にあるものの引用である。ただ読み方は福永が将欲にほつのルビをふるのに対して宮本 p・699は将欲とする。老子はこの文に是謂微明とつづけている

④⑯ 宮本 p・699以下 p・700 なおその他説卦伝などより縦横に引用して、この辞句がかかっている。例えば説卦伝第五章 離也者明也 萬物皆相見 南方之卦也・兌正秋也 萬物之所説也 故曰説言乎兌 本田 下 p・354以下 p・355 高田 下 p・291以下 p・293がある。

④⑰ 宮本 p・699以下 p・700

④⑱ 宮本 p・700以下 p・703 爻辞、伝、象更にp・703の大伝で総括する

日本における洋学撰受の一パターン(二)(高瀬)

④⑨ 宮本 p・700 初九以下参照

⑤⑩ 宮本 p・700 九二・其悔得亡也参照 なお、この號々、愬々は易経 高田 下 p・1300~131、133 本

田 下 p・159~p・166 震卦の卦辞、爻辞に震来虩々 上六 震索索として出ているものを用いている。

⑤⑪ 宮本 p・701 六三・抑咎誰也

⑤⑫ ここは宮本 p・701 象曰・其禍自取也 伝・乃自爲之 抑咎誰也 またこの焚如・は離卦九四の爻辞にある。

高田 上 p・262~p・265 本田 上 p・272以下参照

⑤⑬ 高田 上 p・34 六爻を人の社会的地位に配して初より上までにそれぞれ庶人、士、大夫、公卿、君、無位の尊者の位とし、またこれは説卦伝にもみられる如く人体各部など多くの事象と対応せしめられる。

⑤⑭ 宮本 p・701~p・702 九四大善 大其舟・何能稱雄於天下哉

⑤⑮ 宮本 p・702 象によつて夫々爻辞の有善 大其舟を補説する 象曰 有善 思隣戒・反而觀之 利害見矣参照

⑤⑯ 宮本 p・702 伝六五・雖欲其譽不終 不可得也参照

⑤⑰ 宮本 p・702、859以下 原文の不可飾之以非其非の非其非はこれまで疑問とされたもので是其非とすべきであるとみられた。事実、表現的には矛盾した文言であると思われても尤ものである。宮本仲氏も始めはそう考えられたが嘉永六年二月山寺懼堂宛ての手紙によつて象山自身が非其非 非其是の非は虚字であり、是非の非ではなくこれによいとしていることが分つたので原文が正しく、是其非と読むべきではないとの確信をもつに至つたとのべられている。氏はここは飾りたてて以て其非に非ずとすべからず、これを誣して以て其是に非らずとすべからずと訓むのであらうとされている。上で既に事の非なるものをとしているのでそれが非であることをそうでないと言ひ繕つてはならぬとれるので氏の推定が正しい訓み方であらう。

なお、ここでの事、理の対応は注目すべきものである。

⑤⑱ 宮本 p・702 伝 事之非者・其孰能與於此参照

⑤⑲ 宮本 p・703 上九 執其故 貞吝

⑥⑰ 宮本 p・703 伝 卦 本睽也・豈不可羞吝乎

⑥⑱ 宮本 p・703 象曰 執其故貞吝不知公也 伝 所以執滞偏固 不舎其故・故学尚致知

⑥⑲ 本田 p・14~p・15

⑥⑨ 宮本 p・703 なお、この原文はそれぞれ高田 下 p・255、p・256 本田 下 p・317の繫辭下伝にある。ただ原文は以威天下のあとに蓋取諸陰がつづく。

⑥④ 宮本 p・703 伝 高者抑之 下者譽之 反戾陰乖・當今之世 非此器 無足以威服外内也 この外内に砲を特に外敵に用いるべきことが示唆されている。

⑥⑤ 宮本 p・703、p・705 なお、宮本 p・860によると後記は既述したように嘉永五年夏撰せられた本文の後十月伝とともに脱稿されたとしている。後記は易学の大家として十翼に通曉した象山の知識がまさに縦横に駆使され、素人の私には極めて難解であり、どこまでとらえ得たかについては全く自信がもてない。専門家の叱正を得れば幸いである。

⑥⑥ 宮本 p・703、p・704 以易卦別命名繫詞 自宋未即有之矣・而尚不識其體裁 殊為可笑矣参照

⑥⑦ 宮本 p・704

⑥⑧ 宮本 p・704 如初九習有素 九變為八 初至五 體習坎 故為習參照 なお、習坎については高田 上 p・255

本田 上 p・260以下参照 また九變為八については繫辭上伝第九章以下で数に關して扱われている。易では前述したように奇数が陽、天數 偶数が陰、地數であるが、これらは五位相得而有合更に参伍以變 錯綜其數 通其變なのであって易は逆數なりの言の如く常に反對のものを含み得る。だから、ここでも九という陽數はまた少陰たる八に變じ得るのであり、三爻から五爻までにかけて三つまり陰卦たる坎がでくるとみる。高田 下 p・233以下 本田 下 p・285以下

⑥⑨ 永田 p・221所収の表によると兄は白である。ただp・220の九星との対応で赤となるが、氏は色の配当には多分に陰陽のルールとちがうものがあると付言されている。

⑦⑩ 高田 下 p・291以下 本田 下 p・354以下 説卦伝第五章 兌正秋也 萬物之所説也 永田 p・220、160参照

⑦① 宮本 p・704 高田 上 p・152 本田 上 p・130 初九 素履 往无咎 高田 上 p・217 本田 上 p・221 上九 白賁 天咎とある。

⑦② この点は既にふれた。例えば説卦伝第五章 離也者明也参照

⑦③ 本田 p・34 内卦と外卦の第一、第二、第三爻どうし陽陰である時相応關係ありとされ、これが応である。また 高田 下 p・300 本田 下 p・364 説卦伝第十一章 離為火 為日・によって応ある日として昼日となる。

日本における洋学摂取の一パターン(二)(高瀬)

- ⑦④ 説卦伝第十一章 震為雷 爲龍・・爲大塗 高田 下 p・298 本田 下 p・361
- ⑦⑤ 高田 下 p・130~p・132 本田 下 p・159~p・165
- ⑦⑥ 説卦伝第九章 震為足・・坎為耳 離為目・・兌為口参照 高田 下 p・296 本田 下 p・358~p・359
- その他説卦伝 第四章 雷以動之 雜卦伝 震者動也 など参照
- ⑦⑦ 宮本 p・704 如六三・・棄之象まで参照
- ⑦⑧ 高田 下 p・289~p・290 本田 下 p・353~p・354
- ⑦⑨ 高田 下 p・291~p・293 本田 下 p・354~p・356
- ⑧① 宮本 p・704~p・705 如九四・・在去故擇新 なお、ここで劍 昔用銅 後用鐵 今則刀 鏃 昔用石 後用銅 今則鐵 昔之戟戈 後世不用 今之槍銃 古今所無 是可以見兵之所以為革矣と割注の形で兵器の変遷について述べる。
- ⑧① 革卦、噬嗑卦、豊卦については高田 下 p・118 本田 下 p・144 高田 上 p・209 本田 上 p・204 噬嗑 象曰 雷電噬嗑 先王以明罰勅法 高田 下 p・154 本田 下 p・187 豊 象曰 雷電皆至豊 君子以折獄致刑とある。また巽について高田 下 p・291、299 本田 下 p・354、362 特に本田 下 p・362に巽には命令の意味があり、命令は人を正しとなっている。
- ⑧② 宮本 p・705 離火當革之 而反執之何也参照
- ⑧③ 宮本 p・705 蓋指三也・・離變為震と前掲注⑦参照
- ⑧④ 高田 下 p・296 本田 下 p・358~p・359 艮為手参照
- ⑧⑤ 宮本 p・705 離變為震 震倒艮也 艮為手 有執之義 上九在睽乖之極 故有反戾執滯之象也
- ⑧⑥ 宮本 p・705 予為伝 欲釋此数象之意 而或恐道理落第二義 故別筆記以附于後云と後記執筆のねらいについて自ら語っている。特に傍線部に注目する必要がある。

III

① 象山の独自の個性についてはI ⑧、⑩参照 また礲卦後記 以易卦別命名而繫詞自宋未即有之矣 輟耕錄載輟各等卦 是也 然皆出於文人一時之巧思 而與易之觀而繫詞者 全然不相類 且易之象象 句皆有韻 而是則間然焉 彼方文士 擬其古

經 作之文字而尚不識其體裁 殊為可笑 今予所為 其可韻者 悉用古韻 至其所繫之詞 亦無一字不寓其象・ここに省書録雜説に通ずる自主性があり、單なる模倣でない自らの一家言をたてんとするのである。

- ② I ③ 参照 象山は宮本 p・180にある書頼子成邊防諸策後で求其弁博縱橫 究知當世之利病 如頼子成者 殆絶無而僅有と評價している。象山は自主的経験定位にあたつて山陽のような屈折を経ず易理によつてその体系構成を行なつた。その際、朱子学、更には日本の想念構図、自主的経験の定位この組み合わせが用複合体形成に導いたと推定されよう。彼にあつては礮卦にみられるよう、朱子学に特に易理によつて接近するのであり、易理そのものが理と占筮の両面を具えていたことが彼に両是の発想をうませたとも言えるのである。

- ③ 中村 時代 下 p・171

- ④ 中村 時代 下 p・171、188特にp・188の公武合體論が山陽の友、星巖によつて具体化されたとの叙述参照 暗にそういった構想が山陽の中になつたわけではなかつたといえよう。

- ⑤ 中村 時代 下 p・5～p・145ここで四グループを中村氏はあげるが氏自身そのp・123で第四グループは正確な意味ではグループと称し難い・世間もまた彼らを山陽の弟子とは見ていないと言つておられるのでここでは省いた。この三グループは確かにそこに世代差が反映しているが、体制的・反体制的な色わけがあり特に三男鴨崖三樹三郎は尊攘派として安政の大獄で逮捕処刑されている事実の底流にはかかる分立が存したと言ひ得るであらう。中公 19 p・140

- ⑥ 中村 下 p・182

- ⑦ 中公 18 p・440、429、355、357、363、367参照 ここで天保改革を必然化した基本的条件の一つは他ならぬ天保期外圧に対する領主層の深刻な恐怖感であつたという叙述の底にはかかる対内的危機対応の延長が見られよう。またこういったものと並んで洋学自体の動きも封建権力への奉仕と現状打開との間を往来している。

- ⑧ 中公 18 p・428

- ⑨ 中公 19 p・2～p・3

- ⑩ 中公 19 p・7 本郷 p・33、34、36

- ⑪ 中公 19 p・5～p・6

- ⑫ これは今後の課題である。ただここでは阿部吉雄 日本朱子学と朝鮮が日本朱子学の形成に李 滉(退溪)の影響ありとの

示唆は極めて注目すべきものである。日本のこの時までの外圧はモンゴルの東征にみるように西よりのものであった。朝鮮半島が、まず外圧の矢面に立ち、そこでこれに対して抗体をつくり自らを免疫化する。日本はこのいわば半島のワクチンを輸入することで自らの抗体形成をつくる過程を省略し得たのである。この意味で、西洋による外圧は日本にとって、二重に異種であった。だが、これを既成の免疫抗体で同化したのであり、そこに日本の異文化組み込みの慣性化したパターンがある。韓国で主張されている文化的な日本への恩恵の実体は文化内容というよりもこういった型で抗体形成過程を日本に省せたところにあるといえよう。

⑬ 中村 上 p・247

⑭ 中村 下 p・92 中公 p・32~p・34 p・115 西郷吉兵衛についての叙述参照

⑮ 中公 19 p・31~p・32

⑯ 中公 19 p・35~p・40 p・46~p・54

⑰ 宮本 p・519~p・520

⑱ 植手 p・296 英国に此無道有之候上は西洋諸国に於いて果して天地公共の道理を奉行し候はば……ここで示唆されている。

⑲ 異種体験の組み込みを前にして道よりの方向卓越にたつ山陽的用複合体は既知值的に道を措定し、同時に切り捨てを帶有するものであった。だからボルツァーノ級数に答えを三つ出すのと同じ無限の有限の既知値化を施したものであったのであり、分立をつくり出すのも已むを得なかったといえよう。

⑳ 功は洋学摂取を可能にしたことであり罪は和魂洋才的に土着思想を温存させたことである。

㉑ 宮本 p・498 植手 p・656~p・657 また次の注の引用文参照

㉒ 宮本 p・498 門人小林虎三郎に贈る書 近年西洋所發明 許多學術 要皆實理 祇足以資吾學 而世之儒者 類皆凡夫庸人 不知窮理 視為別物

㉓ 象山の拡張の志向を示す資料は多い 中でも省譽録雜説 条十一 雜文での孟子、孫子に言及したものをあげておこう。なお、宮本 p・216 善く過を改めることが貴いという叙述参照

㉔ 植手 p・655 L・1~L・5 またp・655~p・656 参照

②⑤ 植手 P・366 安政三年七月十日勝海舟宛書翰 且洋学に資し候所はもと政教の論に無之 唯技術器械の智巧を極め候所を採用し、彼れの侮を受け候はぬ為の・・・参照

②⑥ 植手 原文 P・421 訳 P・402 題孔夫子画像参照

②⑦ 省營録雜説 条二十一 また前注②④

②⑧ 植手 P・365、P・366 前掲勝海舟宛書翰 洋学盛に行はれ候とても本邦の風俗に碍るまじき事は、漢学の例にてよく分り候事と被存候と西洋学盛に被行候はば、漢学其圧倒を受け、自家嘗て学び候所の説、立ちかね候はんことを恐れ候より、偏執媚嫉の念を生じ・・・参照

②⑨ 中村 時代 下 P・188、186に示唆されている。だが全体としては空想的であつたことに注目する必要がある 中村 時代 下 P・170、216、219

③⑩ 植手 P・658 P・656、P・657

③⑪ 中村 下 P・187 L・2、L・6

③② 宮本 P・91 先生と江川坦庵の節参照 特にP・94、P・95 嘉永三年七月十日母宛ての尺牘 江川にしてはけしからず伝書など惜しみ候 また象山の開放性については宮本 P・75 P・522 特にP・522の隠すことなく・・・に注目のこと。

③③ 宮本 P・342、P・344、304 宮本 原文 P・679 是則迂濶之甚者也

③④ その一例として既掲の勝海舟宛書翰中に身みづから其道徳を修めずとある点と(植手 P・366)省營録雜説 条四十並究而悉之乎 吾未之知也があげられよう

③⑤ 植手 P・657 象山は格物致知よりも格物窮理という言葉をよく使うとする 宮本 P・498にも物に就いて理を窮めるとある。彼の二面思考によると格物致知には確かに二つの意味があるとみることになるがこれまでややもすると等閑視されたこの帰納的な意味づけを明らかにするため格物窮理という表現をしたとも考えられる。

③⑥ 植手 P・324 注 ここで司馬法の両之に敵のよいものを見れば、これを模倣して敵だけに独占させないという意味がある。両之は「これをふたつにす」とも読めると解説する。象山は両之の他に宮本 P・300では両是とする。植手 P・378で同じ書束が掲げられているが、ここでは両之の手段に仕候の外無之奉存候 此両之の術は、となつている。ここでは

一応宮本に拠ることにした。

- ③7 ヘーゲルが *die Phänomenologie des Geistes* を公刊したのは一八〇七年文化四年である。今のように情報交換の極めて早い時代であればすぐ知られた筈である。併し、幕府による洋学統制による情報鎖国は象山にこれを知るを不可能にした。だが省魯録雑説条四十六に語られる如く若しも知ったとしたらその闇合の妙に驚いたであろう。

- ③8 宮本 p・498 Ⅲ注②参照

- ③9 植手 p・296

- ④0 植手 p・666~p・667 省魯録雑説条二十 東洋道德 西洋芸術という言葉は前者を基礎とし、その上に西洋の科学技術を接木しようとしたものであるとの解釈参照 これは本文のように考えると明白になろう。なお菜肉と食は植手 p・403 参照

- ④1 植手 p・660、680、679 宮本 p・302 学問における規矩準繩性を重んじ、脈絡 西洋窮理の成法尊重を説く

- ④2 宮本 p・37

- ④3 植手 p・304 時政に関する幕府宛上書稿 皇国を第一等の強国に被遊候御偉業・参照

- ④4 遠山 啓 数学入門 下(岩波新書)

- ④5 植手 p・667 672 省魯録雑説 条十九

- ④6 植手 p・672 ここで勅諭草案は松浦 p・303 私はうらないによって天の神のこの問題について御心を問ひ奉ろうと思つてと訳出されている。

- ④7 植手 p・678 ここで引用されている文久三年七月二十二日勝海舟宛書翰に天下之事に両是・両非とは無之 必ず一是のみにて候参照

- ④8 植手 p・687 前注に掲げた書翰の後半に大学の格物・洪範の皇極 皆其事に御座候 斯聖学 此紛々を醸成し候事不堪嘸嗟候とある

- ④9 本田 上 p・20

- ⑤0 植手 p・363~p・370 p・298~p・320 学校、貿易理財制度にそれぞれ言及している。

⑤1 植手 p・670

⑤2 植手 p・670、p・671

⑤3 植手 p・298、p・320、366 ここで洋学に資し候所はもと政教の論にては無之にも注目する要があらう

⑤4 植手 p・323

⑤5 植手 p・363、p・370

⑤6 植手 p・672、670

⑤7 植手 p・670、323 植手この攘夷の策略に関する藩主宛答申書 外国にも追々日本領とも被為開参照

⑤8 植手 p・668 植手 p・414 松浦 p・98 なお 植手 p・324 攘夷の策略に関する藩主宛答申書 其国

力 敵国と倅しにに至らずして兵を構へ候ては其徳其義いか様彼れに超過候とも其志を得候義は決して難出来是乃ち天下の正理、実理、明理、公理に御座候参照

⑤9 本郷 p・93、p・94 植手 p・666 注

⑥0 植手 p・666、668

⑥1 宮本 p・457、p・458 またこの p・458 士道の本義は参照

⑥2 植手 p・668 p・663、p・666

⑥3 松浦 補注 p・507 ここで象山が原文に加筆していることが示唆されている

⑥4 植手 p・654、662、663、664、666 儒学・洋学および両者を媒介する武士道 主知的概念的論理的な朱

子学の精神と並んでこれと交錯しつつ、時には対立しつつ実践的非合理的ないわば武士精神が存在し、この儒学的精神と武士(道)的精神といういわば二つの魂が象山の精神態度の根底を形づくっていたが二つの魂は時に調和し、時に対立しつつ、彼の思想と行動を規定していた。いわば儒教的な系譜をひく士の職分観と武士道的な流れを汲む主君への忠誠観とが微妙に絡み合いつつ、その実践性と奮闘主義を支えていたこれが植手通有氏の主張であるが、若干未整理であるように思われる。

⑥5 植手 p・666

⑥6 だから、日本的な構図はかくされた形として二つの働きを営んでいることになる。武士道—程朱の道—皇国の道の展開で程朱の道として意識されながら、上下にそれぞれ日本の構図の隠されたものをもつからである。宮本 p・347 皇国の御為

p・734 天保十二年海防八策 事勢に依り候ては世界萬國無之百代聯綿とおはしまし候皇統の御安危にも預り候事にて獨り徳川家の御榮辱にのみ係り候義に無御座候 また時政に関する幕府宛上書稿中の上は宸襟を・参照

⑥7 丸山直男氏は福沢において実学の転回があったとされるが、朱子学への実学的洋学摂取を可能にした象山にあって既に西欧想念の構造に模した用複合体の両是の構成が行われ、事実上、上よりの下降の上昇への転換による転回があったとみたい。福沢はここでの構成肢たる東洋と西洋との積極・消極の転回を行なったのであり、そこに福沢における実学の転回の意義が存するのではなからうか